

エントリー名：広島県立福山特別支援学校 平松紀恵、三堀正貴、池田ひとみ

活動名：バラでみんなとつながろう！
 地域リソースを活用した共働的な学びの実践



解決すべき課題：児童生徒が地域・社会とつながりをもつためにはどうすれば・・・

本校は、肢体不自由教育を担う特別支援学校である。重度重複障害（身体障害と知的障害を併せ有する。）を呈する児童生徒が多く在籍しており、児童生徒の身体、認知など発達段階に応じた配慮や工夫をしながら、教育活動を遂行している。学習指導要領で「社会に開かれた教育課程」の実現が求められているが、身体を自由に動かすことや自ら表出することが困難な児童生徒達において、「学校内」もしくは「家庭」といった内部環境での教育活動に制限されるため、実現が難しい状況である。現在でも、校外を意識した教育活動として児童生徒の作品をホームページに掲載したり、近隣にある唯一の商業施設に展示したりと、地域・社会とのつながりを意識した教育活動を行っているが、児童生徒が直接的に地域の人と関わる機会が未だ少ない。

目標・方針：地元、福山市が掲げるローズマインドを教育課程に・・・

本校の所在地、福山市の花であるバラを題材にした学習を通して、地元への興味関心を高め、郷土愛を育てることや福山市のまちづくりの取組から、平和について考えたり、市民の思いを知ったりして、福山市が掲げるローズマインド（思いやり、優しさ、助け合いの心）を本校児童生徒に育むことを目的とした。教務部を中心に、教育課程の大変革を進め、福山市役所などの関係各所と連携し、令和7年度5月に開催の第20回世界バラ会議福山大会に参加し、地域・社会とのつながりを意識した教育活動の実現を目指すこととなった。

活動内容：課題を乗り越え、校内全員の気持ちを一つに・・・

① バラ園づくり

福山市は「100万本のばらのまち」と呼ばれており、戦後復興から現在まで市民がたくさんのバラを育てている。本校に訪れる方々が目につきやすい場所である玄関前にバラ園を作ることとした。本校の生徒は、今までバラを育成した経験がなく、ノウハウもなかったが、バラの育成に詳しい地域の方の助力を受けて、晴れて大規模なバラ園を完成させることができた。



生徒デザインバラ花壇

② 給食でバラを使ったデザート開発

地元の企業が商品化している食用バラのジュースを使用したデザートを栄養教諭が考案し、給食でパンナコッタを提供してもらった。その企業からバラジュースについての学習用の動画を提供して下さることとなり、食育が深まった。また、国語科の授業でお礼状の作成をすることで、教科横断的な指導にもなり、目標を大きく上回る結果となった。



バラジュースを使ったパンナコッタ

③ 第20回世界バラ会議福山大会への参加

【美術科でバラをモチーフにした「しおり」づくり】

本校生徒がデザインした「しおり」を世界バラ会議福山大会の参加者に配布した。生徒は福山市の景勝地「鞆の浦」の常夜灯を調べ、バラの絵と共にデザインした。全校生徒及び保護者教職員の投票にて2案を選定、800枚を作成配布することができた。

【世界バラ会議開会式参加】

世界バラ会議福山大会の開会式に市内の小学生と特別支援学校の児童生徒が招待され、児童生徒会から2名が出席した。参加者と直接交流をしながら、本校作成のしおりを実際に手にした参加者を確認することができ、貴重な経験となった。

【世界各国のバラ関係者向けデイツアーに参加】

約1週間続く世界バラ会議福山大会は、参加者がバラに関係する箇所を巡るデイツアーが催される。本校の近隣施設の福山サービスエリア上り線のバラ花壇にも参加者が立ち寄るため、行政や運営協議員と連携し、本校のブースを設けて本校紹介動画の上映やしおりやチラシの配付、参加型アート等で参加者と児童生徒が直接交流することができた。



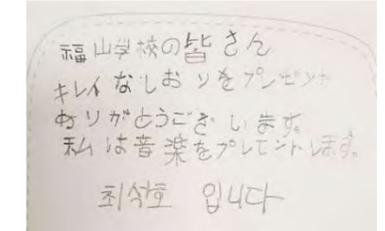
開会式に出席する様子



本校が作成したしおり



デイツアーで外国の方と交流



姉妹校からのしおりのお礼

④ 近隣の子ども園、小学校、特別支援学校等の学校間交流・姉妹校交流

世界バラ会議福山大会の参加者向けに作ったバラをデザインしたしおりを地域協働のためのツールと考え増産し、近隣の子ども園、小学校、特別支援学校に配布した。また児童生徒会からは手紙を添えて、韓国の姉妹校にプレゼントすることができた。姉妹校からはお礼の言葉と楽器演奏をしている動画が送られ、特別活動等の時間で視聴することができた。

⑤ 校外学習・体験学習の内容見直し

これまでの校外学習先の選定基準を見直し、バラを観察できる時期や場所を選定することができた。図書館、福山駅や福山市役所、美術館や歴史博物館、市立大学等の公共施設を中心にバラに関する場所で学習を深めている。また、校内における体験学習として、バラのバスボム作りやまちづくり出前講座等の外部講師を活用する授業を展開した。

⑥ 学習内容の変化・充実

バラの色、香り、種類、花びらは重度重複障害の児童生徒にも分かりやすい題材であり、探究課題として設定しやすいことを教職員に周知したことで、各教科や合わせた指導、自立活動において積極的に扱う学年が徐々に増えてきた。年間指導計画に「」のマークを追記し、教職員が授業づくりの際に意識付けを図っている。



学校に提供されたバラや花びらで足湯をする様子

取組の過程：一人ひとりがインフルエンサー・・・

- 学校運営協議会の委員が大学教授、地域関係者、行政、PTAで構成されていることから、学校の実態を踏まえて地域協働学習を推進するためのアイデアをもらうことができた。
- バラを軸に主体的な学びを展開することが決まった後は、委員たちがインフルエンサーとなってくれたことで話が広がり、関係各所と連携がしやすくなった。
- 教務主任を中心に分掌主任や参画意識のある有志を招集し、「ふくとく つながローズ プロジェクト」を立ち上げ、頻回にプロジェクト会議を開催した。
- しおり代はPTA会費で計上し、印刷会社に依頼することができた。

活動の成果：児童生徒が地域・社会とつながることができた！！

- 高等部生徒によるバラ花壇づくりにより、全校生徒がバラに直接触れ合う機会が増えるだけでなく、各学年で授業の充実化が進み、掲示物や作品が増えて学校が明るくなり来校者に見てもらえるようになってきている。
- 教職員、保護者への取組への理解が徐々に進み、ばらの花を提供してもらうことが増えてきた。これは地域協働の意義や取組の価値が浸透してきたためと考えられ、その他の体験活動として移動図書館や読み聞かせ、パラスポーツ体験等、校内での体験学習の増加・充実にも繋がっている。
- 取組を通して付けさせたい力は何か、どのように学ばせるかというアクティブ・ラーニングの視点で教員が話し合う機会が増え、授業改善を進めることができています。